

## 令和6年度 第1学期終業式 講話

夏季休業期間を迎えることとなりますので、第1学期の終業式を執り行います。

まず、4月8日の始業式の際に、次の二点について伝えました。それは、個人のみならず、個人を取り巻く場や地域、社会が持続的に良い状態であるウェルビーイングの実現に向け、様々な主体的な取組が展開されること、さらに、地域社会が抱える課題に向かいながら、その解決に向けて必要な知識や技能を日々の授業をとおして身に付けることを期待するということでした。これらの点を踏まえ、本学期において、充実した日々を過ごすことができましたか。第1学期を振り返っての所感について、各自キャリアパスポートに記してください。

さて、本年7月に入り、私たちの身の回りで、平成16（2004）年以来20年ぶりに社会経済上の変化が生じました。このことについて、思い浮かぶことはありませんか。それは、紙幣の切り替え、すなわち新紙幣が発行されたことです。この新紙幣のうち、1万円に肖像が採用された人物、すなわち渋沢栄一について触れていきたいと考えております。渋沢は、中国でアヘン戦争が起こった1840年に現在の埼玉県で生まれ、世界恐慌が発生した直後の1931年にこの世を去っています。第一国立銀行、大阪紡績会社、東京ガス、王子製紙、東京海上火災保険、帝国ホテル等、500社ほどの企業や東京証券取引所の設立に関わり、「近代日本資本主義の父」と言われています。また、東京商業学校（現一橋大学）、日本女子大学校（現日本女子大学）、東京女学館等の立ち上げにも尽力しています。1916年に刊行された『論語と算盤』が代表的な著作であり、企業の目的が利潤の追求にあることは間違いではないが、その根底には道徳が必要であり、国や人

類全体の繁栄に対して責任を持つことを忘れてはならないとする道徳経済合一説を説いています。また、第一次大戦に伴う景気に沸く当時の社会を顧みて、「今の青年は、ただ学問のための学問をしている。初めから「これだ」という目的がなく、何となく学問をした結果、実際に社会に出てから、「自分は何のために学問してきたのだろう」というような疑問に襲われる青年が少なくない。」と分析しています。

ところで、夏季休業、いわゆる夏休みの由来について、19世紀のアメリカやヨーロッパにおいて元々は農業社会のニーズに応える形で生まれたとされており、夏は農作業が最も忙しい時期であり、子供たちは、学校から離れることにより、家庭での労働力としての役割を果たすことが期待されていました。我が国は、明治時代の初期に欧米の制度を移入し、夏休みについてもその頃に採り入れられています。

こうした歴史的経緯も踏まえると、夏休みを充実させるためには、家庭及び地域社会等において自分自身の役割を果たすとともに、本分である本校生徒として成すべきことを確実に果たすことが求められています。また、100年ほど前に渋沢が疑念を抱いた、学習を進める上での目的・目標についても深く考えることが大切であると考えます。

その手立てとしては、読書活動をとおして先人の知恵や生き方・在り方を学ぶこと、機会があれば博物館や資料館を訪問するなどして本物に触れること、自分自身をよく見つめ将来を展望することといった取組が考えられます。自分が対応できることをよく考えてください。

最後に、渋沢は、「一人一人に天の使命があり、その天命を楽しんで生きることが処世上の第一要件である。」と述べています。皆さんがこの夏を有意義に過ごし、成長を遂げた姿で第2学期を迎えることを期待しています。